

斎宮村を支えた乾家と永島家

現在の斎宮、竹川、上野、有爾中、平尾の5自治会は、江戸時代には伊勢神宮が直接管理をするエリアで、神領五箇村と呼ばれていました。この五箇村からの年貢は、伊勢神宮を支える重要な経済的基盤でした。

中でも斎宮村は、五箇村の中でも半分ほどの収穫があり、他の四箇村とは異なる扱いを受ける格式がありました。その斎宮村で庄屋格であったのが牛葉自治会の乾家と永島家でした。



江戸時代の絵図に描かれた
明和町の村々
黄色に塗られた部分が
神領五箇村（明和町史より）

神宮領：約6198石

竹 川：約 400石

斎 宮：約1750石

上 野：約 510石

有爾中：約 610石

平 尾：約 130石

合 計：約3400石

さらに詳しく知りたいときは…

「古文書・古記録から読み解く郷土の歴史

—江戸時代の明和町—

皇學館大学×明和町地域連携協議会公開講座



乾家

伊勢国司北畠氏の客分であった初代乾寛助源休が、北畠氏滅亡後に西堀木郷と呼ばれた牛葉周辺を開拓し庄屋となりました。今も江戸時代に神宮側とやり取りした古文書が多数残されています。また、参宮土産として人気だった煙草入れを販売しており、当時の看板が残されています。

明治以降は斎宮村村長を務め、斎宮村の発展のために、現在の近鉄線の誘致などに取り組みました。

現在、江戸時代に建てられた乾家の門と塀は国登録有形文化財となっています。



乾家に残された江戸時代の記録
「乾家御用留」



擬革紙の煙草入れを
販売していた頃の看板



伊勢街道に面した乾家(昭和8年(1933)頃 大西 源一氏撮影)

国登録有形文化財「乾家住宅門および塀」



永島家

乾家とともに斎宮村の庄屋格だった家で、斎宮池造成に尽力しました。

江戸時代には曾我蕭白が滞在し、家のふすまに絵を描いています。現在、重要文化財に指定され、三重県立美術館が所蔵しています。

明治には10代永島雪江が多気郡長を務めました。明治2年(1869)と明治13年(1880)には明治天皇が行幸される際に、休憩所となりました。現在もその時に使われた菊御紋入りの蹲(水を貯めて手を清める石の鉢)や木札が残されています。



伊勢街道に面した永島家(昭和8年(1933)頃 大西 源一氏撮影)



曾我蕭白が描いた「竹林七賢図」(部分)
明和町史より



曾我蕭白が描いた「松鷹図」(部分)
明和町史より



菊の御紋が入った蹲